

現代の女流文学

編集 女流文学者会

1

円地文子
倉橋由美子
竹西寛子
広池秋子
小山いと子
大谷藤子
網野菊

毎日新聞社

編集 女流文学者会

1

円地文子

倉橋由美子

竹西寛子

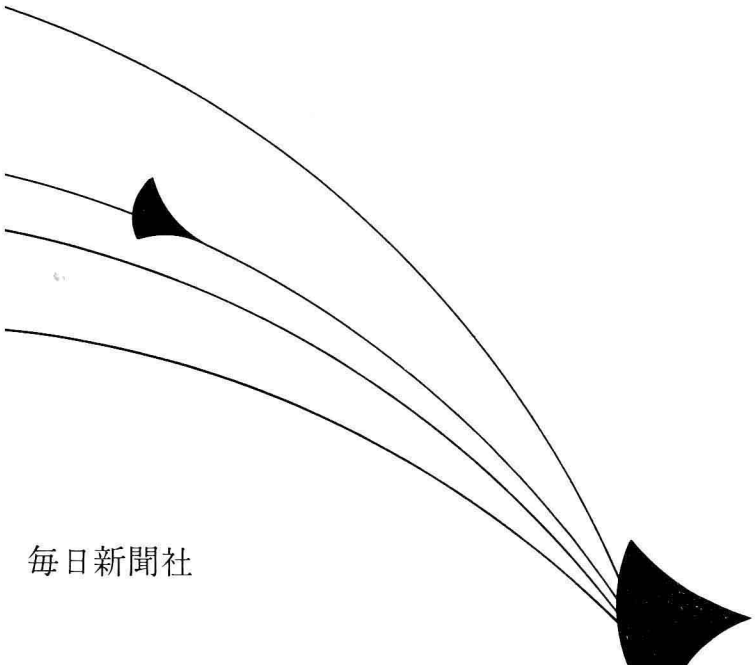
広池秋子

小山いと子

大谷藤子

網野菊

毎日新聞社



現代の女流文学 第一卷

定価 一二〇〇円

昭和四十九年八月二十五日 印刷
昭和四十九年九月二十日 発行

編集 女流文学者会

編集 円地文子
委員 佐多稲子

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

図書印刷 大口製本

〈検印省略〉

現代の女流文学 1

目次

円地文子

朱を奪うもの 5

二世の縁拾遺 97

倉橋由美子

ハルタイ 113

ヴァージニア 129

竹西寛子

儀式 173

広池秋子

オンリー達 193

大谷 藤子

最後の客
213

小山いと子

執行猶予
237

網野 菊

さくらの花
279

一期一会
309

中村 佐喜子

女流文学者のあゆみ 1
325

磯田 光一

解説 女における祭儀
329

裴
楨
安
東
澄

朱^{あけ}を奪うもの
第一部

円地 文子

円地 文子

明治三八（一九〇五）・一〇・二一。東京に生まれる。本名富美。東大教授上田万年の次女。日本女子大付属高女中退。大正一五年、雑誌『歌舞伎』の一幕物時代喜劇懸賞で「ふるさと」が当選。昭和三年「女人芸術」に発表の「晩春騒夜」が同年築地小劇場で上演される。同五年「東京日日新聞」記者円地与志松と結婚。戯曲集『惜春』を処女出版（昭10）したのち、小説に転じ、「日曆」「人民文庫」に加わり、「散文恋愛」などを発表。同一九年、「ひもしい月日」で第六回女流文学者賞受賞。同三二年「女坂」により第一〇回野間文芸賞を受賞。同四一年、『なまみこ物語』により第五回女流文学賞を受賞。同四四年、長篇三部作『朱を奪うもの』（昭31）『傷ある翼』（昭37）『虹と修羅』（昭43）で第五回谷崎潤一郎賞を受賞。同四二年、小学校時代より親しんだ『源氏物語』の訳業にかかり、全一〇巻を刊行（昭47・48）。

その他の著書に『女坂』（昭14）、『春秋』（昭18）、『妖』（昭32）、『二枚絵巻』（昭33）、『東京の土』（昭34）、『私も燃えている』（昭35）、『花散里』（昭36）、『雪折れ』（昭37）、『円地文子文庫』全八巻、『小町変相』（昭40）、『樹のあわれ』（昭41）、『菊車』（昭44）、『冬の旅』（昭47）などがある。

芸術院会員。女流文学者会会長。

第一章 朱を奪うもの

宗像滋子は歯科大学の抜歯室の椅子にがつくり頭を倒してぼんやりしていた。口の中には一ぱいガーゼがつまっていた。今しがた抜きとられた歯から左側の上唇一帯が注射薬にしみびれてゴム鞠のようにふくらんで感じられた。

「さあ、これで全部抜けました、もう歯痛で苦しむ思いは一生ありませんよ」

柔和な笑顔のS教授は滋子の肩を軽く敲いて、しばらく静かにしているように言捨てて去って行った。

S教授の言葉にはうなずいて見せたが、口の中にもう自分の歯が一本もないのだと滋子を実感したのはそれから可成り経ったあとだった。細い注射針を何本も突き刺されて痺痺している歯齦から歯を引抜く間、感じられる痛みは殆どなかったが、抜歯器にしっかりと挟まれた根の深い歯が無慈悲な力でもりめりと肉から離れてゆく瞬間には、他の感覚が全部生ききているだけに、もしそこが痺痺していなかったらどれほどの苦痛に七顛八倒するであらうと想像するだけで身体中が縮

み、気死の状態に陥ちこんでしまった。口の中ががらん洞になった、亀の子の口のようになつたと気づくとあつと声を立てそうになった。長年齲歯や歯槽膿漏に苦しめられて来た歯の最後の始末がついて、ほっとするよりも大切なものを盗まれたような喪失の思いが強いのである。

滋子はそっと身体を起して眼の前の台の上の銀色の盆を見た。そこには、鉤や鑿や釘抜きに似た抜歯器具や注射器と一緒に、今滋子の口から抜き取ったばかりの四五本の歯が行儀よく置並べられていた。大抵先きは朽ちていたがどれも根が茶っぽく汚れて煙草染みた象牙のバيبの色であった。中に一本細い牙のように根が弓なりに曲って三センチ近くもある歯があった。滋子はその歯をおさるおさる指さきにつまみとって眼に近くよせて見た。この歯は左の前歯から三本目にあつてもう二三年来抜けそうでぬけず、川水に揺られる杵のように舌のさきで動かすとぐらりぐらり動いていた。もう抜けるだろう、ぬけるだろうと、つい今朝まで舌のさきで癖のように動かしてつづけていたのに、今ぬきとって見るとこの根はこんなに深く肉に食入って、二センチ近くも埋っていたのである。滋子はその歯の肌をそっと触つてみて眼に触れる部分の滑らかな硬さと肉にくい込んでいた茶色い細い部分のざらざら粗い手当りにこの歯の自分の底から生え出、育ち、生き耐えて来た長い年月を思った。ものを噛む力の失われたこの歯を滋子は荷厄介にして早く抜ける抜けるといじり散らして来たが、歯の肉に食い込んだ生命は思いの外に根深いので

あった。磨滅した一本の歯に滋子はやるせない悔と愛着を感じた。自分の肉体と離れてしまった歯は、もうどんなに足擦りしても自分のものにはならない。自分の生命の一部の死んだのを正しくわが眼で見ているのである。歯はそのまま自分の骨に見えた。

三度目なのだとふと滋子は思つて荒寥とした。自分の眼で見ただけではなかったが、前に二度滋子は身体をメスで切り裂かれ蝕んだオーガンを抉り出されていた。一度は右の乳を結核菌に冒されたため、もう一度は女だけの疾む痛であった。手術を受けた二度とも性器の病氣なのが滋子には何かの呪詛のように気味悪く思われた。乳を切った時はそれほどにも思わなかったが、二度目の手術を受けたあとでは、女の性質を失つて行くのではないか、そういう性の喪失がやがて生きる力をさえ失わせるのではないかと不安に苛まれることが多かった。その時に滋子を力づけたのは何とも奇矯な聯想であったが、司馬遷が「史記」を書いたことであった。司馬遷は政治に志を持っていたがそのために事に坐して宮刑を受けた。「史記」は司馬遷のそうした肉体の変化の後に描かれた非情な人間の歴史である。司馬遷は人間に対して酷薄にならざるを得なかったが、彼の冷酷に書きぬいた人間の歴史は、司馬遷の非情を越えて生々しい血や肉のうごめきを数千年を隔てた現在にも感じさせる力をもっている。司馬遷は失われた性の執着を全部史記の中に注ぎ入れたのだ。

こんな風に女性の機能を失ったことが生な悲哀や足擦りに

ならず、すぐ何千年も前の中国の歴史家への共感に滑べつく結びついてゆく自分の思索自体の奇妙さを滋子は滑稽に感じた。これも滋子の中にどっかり据わつて動かない化物の仕業であった。化物は滋子の中に底深く隠されていて、土竜のように陽の眼を見ない。どこから来たのかもはっきり解らないが、滋子の生命の消え去る日までは滋子の肉体の底にもそもそ土をもたげつづけ、滋子の精神に穴を穿ちつづけるであろう。

滋子の身体に乳が一つしかないことも、子宮ががらん洞になつていふことも話さなければ誰れも知りはしない。恐らく亀の子のように舌と唇の吸いつき合う今の歯なしの状態が数日後に義歯でごまかされれば、人は一向注意しなくなる……それ以上に着物の下の秘密は誰れにも気づかれはしない。顔に痣一つ、切傷一つあつても他人は眼をそばたてるけれども、隠された部分の片輪は一向気づかれずそのまま何げなく人生が流れてゆくのだ。こんな片輪がどうにも騙せないのは恋愛の起つた場合だけであらう。滋子は女性の機能を失つた後も幾度か男に恋した、恋をする心にひどく脆いところが出来て恰度薄皮の出来たばかりの新しい傷に風や寒さが滲み透るような痛み易い気持になるのが若いときからの癖であったが、そのフイーブルな心の状態を味う度に滋子は自分の肉体は毀されていても情緒には性が生きているのを頼もしく思つた。しかしそれはそれだけのことで滋子はあの病氣以来自分の身体を爆薬のように怖れていたし、生命への恐怖を凌ぐ

ほど強い情熱の虜になったこともなかった。

もっとも滋子は丈夫でいたところでさえ情熱の不足した女だった。生命全体が焰になって燃え上る瞬間を滋子は曾つて経験したことがない。抒情として男を恋する思いは烈しくもあり、綿々と絶えぬ愛執でもあったが、それは結局あの「かげろうの日記」を書いた王朝貴婦人作家の末裔を自覚させる燃え切らない自我のナルシス風な展開だったのである。抒情を愛情と見あやまって安心していられた間割に幸福だった滋子は、抒情が一種の自慰作用だと自分の心をふき分けるようになってから一層孤独になりそれが本来の自分の是非ない姿に食いしめられるようになった。

西洋映画をみていると「あなたを愛す」「お前を愛す」愛す、愛す、愛すという言葉がふんだんに出て来て男と女が唇を合せたり、力をこめて抱きあったりする。そんな時女は大抵嬉々としているが、男の顔には暗鬱な苦渋が滲んでいる。男の性に負わされた荷物が翳らす陰影なのだ。滋子はスクリーンの上でそういう男の顔を見る度に、性の加害者のようにばかり見られる男が可哀そうで堪らなくなる。そうして男の与えられた荷を理解することの出来なかった自分の過去に悔を感じるのだ。

ふりかえって見れば、滋子はもの心ついたころから生（なま）の間を見失っていた。生きた人間の生活にあるものよりも、遙かに貪婪なめざましい世界を無自覚の中に外から与えられてしまったのだ。それが幸福とか不幸とかの定義にははまらな

いまでも、一見平凡に見える滋子の肉体と精神をアブノーマルに変形させたことは否めない。つまり彼女の中に土竜のように住んでいる化物の正体である。女性の性を半ば以上肉体から奪われた滋子は、今もう一度少女時代から口の中に生えかたまって、一緒に生きてきた歯をぬき去ってしまった。その三つの死を思うと滋子は自分に与えられた生命の歴史の不思議さについて、何とも語りたくてたまらなくなる。滋子は口の中にガーゼの猿轡をされたまま遙かな記憶へ自分を誘って行った。

滋子の記憶の最初のページに浮んで来るのは古風な武者窓のついた黒い長屋門とその門の前の広いだらだら坂の上に赤く塗った丸いポストがぼつんと立っている風景である。坂はいつも人気なく白っぽく乾いている。坂の上は広い通りを越えて靖国神社の境内になっていたから、恐らく小さい滋子は女中の背に負われたり祖母に手をひかれたりして始終その坂を上り降りしていたに違いない。ひよっこや鶯の形の彩色した飴を売る飴屋やヴァイオリンを抱えた艶歌師もその坂の印象と一緒によみがえって来るが、その勾配のゆるい白っぽい坂道は不思議に滋子の思い出の中の一歩静かな心の憩まる場所なのである。六つまで育ったその山ノ手の家の庭の様子や家の造りは殆ど覚えていないのに、庭の隅にあった四角い自然石の空井戸と、その上に蔽いかぶさっていた石榴の樹の小さい照りのよい葉群の間の新しい傷口のように笑みわれた実

の淡紅に光る粒……又井戸の深い底に散りたまつて、風に鳴る枯葉の乾いた音、……そういう断片的な印象は長い年月の堆い塵の底に今も鮮明に残っている。

靖国神社のことを祖母や父は招魂社と呼んでいた。日露戦争からまだ十年とたたないころのことで初夏と秋の祭礼の時になると、青銅の大鳥居のあたりから境内の両側は見世物小屋で一ぱいになった。内へ入ることは殆どしなかったが、祭の時といえは滋子は祖母に連れられてそのひろい境内を埋めている見世物小屋の前をぶらぶら歩いた。どぎつい泥絵具でけけばしく塗りたてた看板絵には、白い細布のようにくねくねうねうねした首のさきに島田髷の娘の顔が笑つてい、胴は三味線を抱いているろくろ首や、身体に金色の鱗の生えた人魚の髪のみく乱れたのや、いくつもの蛇を身体に巻きつけている蛇使いの女の絵などが描いてあつて、その下で異様につぶれた声の客引きが拍子木を敲き敲き因果物の口上を述べたてていた。いくつもの絵がかたかたんと変つておしまいに小さい画面一帯が口の耳まで裂けた猫の顔になる化猫ののぞき機械もあつた。

小さい滋子はごま塩の髪を盆の窪の上で綺麗に切揃えて髪止めではさんでいる、しゃんとした身体つきの祖母を見上げではそれらの異様な看板絵の内容についてきいた。

「皆嘘なんだよ、ろくろっ首というのはね、うしろに黒い幕があつて下に一人三味線を弾いていると首がよろによろのびて上の方で頭の方が笑つて見えるんだけど、よく見てる

とその伸びる首のところが造りもので、上の顔と下の胴とは別々の人間なんだよ。首が上の方へゆくに從つて黒幕の中から顔だけ出して梯子を上つて行くんだろ……人魚だって同じようなものさ。見ている方も騙されてるのがわかつて面白がつてんだから……妙なものだよ」

祖母は江戸っ子らしい男っぽい口のきき方で滋子の手をひいて強い足さばきで歩きながら言つた。しかし滋子の子供の頭は祖母の解説するほど、人魚やろくろ首の非現実性を認めてはいなかった。何故と言えば、母親のない滋子は毎朝眼がさめると隣の祖母の床の中へもぐり込んで祖母からさまざまな話をきくのを楽しんでいたからだ。祖母の話は江戸時代の稗史小説や芝居の筋が多かつたが、それと同じくらいに滋子を昂奮させたり恐怖させたりしたのは、祖母の若いころ育つた江戸の町に市民の間でまざまざと語られていた怪談であつた。本所や番町の七不思議の話、実際に誰れかが見たという狸や狐の化けた話、それらを話し上手の祖母は役者のように手ぶり身ぶりを入れて面白おかしく話してくれた。祖母は昔話をきくことに熱心な滋子を可愛がつて、民話の原則に違わず幼児に前代の物語を伝承しているものであつたが、それらの話自身ろくろ首や人魚の見世物と縁のないものでないことを老人はまるで気づいていないのであつた。

祖母の話の一つに足洗い屋敷というのがあつた。本所の七不思議の一つだつた。その武家屋敷では夜中に天井から大きな毛むくじやらの足がぬつと下つて来るといふのである。そ

の屋敷の中で一番美しい腰元がぬるま湯を沸かしておいて、その足をそつと洗ってやる……足はぬらぬらしていてなかなか綺麗にならないのだが、幾度も洗ってよく拭いてやらないとおとなしく天井へ帰って行かず暴れまわるので、その腰元は怖さを堪えて、綺麗になるまで叮嚀に足を洗ってやるというのだ。男の毛むくじやらの足のぬらぬらしているのをそつと洗ってやる美しい腰元はさぞ怖くて身も世もないであろうと想像するだけで、滋子はすくんで眼を睜り、しかしそういう怖い話をきく度に足を洗ってやる腰元の頸の白さや慄える手のおびえた美しさは普通の美しさ以上に滋子を強く捕えるのであった。

滋子の父の藤木志朗はS大の英文学科の教授であつたが英文学者としてよりも新しい演劇の指導者としての方が遙かに著名でもあり優れてもいた。藤木は四十余年の短い生涯を新劇運動に挺身して終つたが、新劇ばかりでなく、古い歌舞伎の復活や改作にも創意に満ちた業績を遺している。藤木のそういう古典劇に対する愛情は主に母のたねから承けたもので、江戸の侍の家に生れて漢学と踊りと三味線を同時に稽古したというたねは長い未亡人生活の間に二人の男の子を育て上げ、半ば中性化して生きて来たが、彼女を息子達の嫁に対して姑根性にさせなかったのは、それらの素養が常にたねの心を現実以外の世界へ誘つていたためだったかも知れない。最初の妻に死なれてあと、ずっと独身を通してゐる滋子の父

のためにたねは長男の裁判官の家を離れて同居していた。七十になつても記憶の少しも衰えないたねは、生れるとすぐ母に別れて殆ど自分の手で育てた滋子にも普通の祖母が孫に見せるような舐めるような愛し方は全く見せなかった。滋子も祖母の白い艶のよい胸の美しい小さい乳首を口に入れた、たのしくまさぐったりした記憶のある癖に祖母を肉感を持つて母代に感じることは一度もなかった。

それなのに、父が外出勝ちであつても一向母のいない寂しさややるせなさを幼い滋子が感じなかったのは、祖母の傍にいればいつでも面白い物語が祖母の中から吐き出されて来る——それをきいて自分の中へ呑みこむことが限りなくなつたのしかつたからなのである。

藤木が出かけてしまふと広い家の中はひっそりする。主婦のいない家では御隠居さまと女中たちに呼ばれるたねがいつも茶の間の火鉢の前にきちんと坐っている。行儀のよいたねは殆ど膝を崩したことがない。たねの坐っている前には二尺ぐらゐの厚い裁ち板が置いてあつて、その上にはさまざまな着物の布がのつてゐる。たね自身針を動かしていることもある、若い女中に裁ち方やつもり方を教えてゐる時もあった。年とっても首筋のしゃんと立つた眼の切れの美しいたねの様子には老人らしい渋滞がなく、女中や書生からも頼もしい主婦に信じられていた。玄關に客が来ればたねが出て息子の代りの応対をする。家の中は女中達が掃き清めるからいつも塵のあるようなことはないが、装飾的な雰囲気も全くない。

明治維新の大變動に家財の一切を船で紀州へ送り、途中で船が難破して秘藏の一切を失ったというたねは、持ちものには執着がなく、金使いの綺麗な癖に、住居を飾つてたのしむ趣味はまるでなかった。

「いいものは使うのにこつちが氣をつかうのがいやだ」

といつて食器や手道具などもありふれたものを使つていたし、出し入れが面倒だといつて滋子のための難道具も買つてくれなかった。女中はいくらけれども家全体の雰囲気は男っぽく、色彩のない乾燥した清潔さだけが占めていた。

滋子は午前の中は守りの女中と庭や外へ出て遊ぶことが多かった。町の子供とは遊ぶなといわれているので子供同志の友達がなく、昼すぎになつて家の中がしんとひそまつたところになると、たねのいる茶の間へ行つて裁ち板の前に坐り縫いものをしてゐるたねからお話をきくのが日課だった。

記憶のよいたねは若い時分に愛読した馬琴の「八大伝」や「弓張月」の文章を暗誦してゐて、筋を話しながらところどころ固く織上げた錦のような擬古文を朗唱してきかせ、幼い滋子はその文句をよく解らぬながらにすら覚え込んでしまつた。後に考えてみると「八大伝」の発端は犬と人間の女が結婚する不健康なテーマから出発しているのだが、たねはそんなことには顧着なしに、仁義礼智忠信孝悌の八つの玉に象徴されている封建道徳の代表者としての八大士を愛していた。信乃と現八が組合つたまま利根川に落ちた芳流閣の件だの赤岩一角に化けている山猫の退治される件だのを情熱を持

つて語り、滋子は祖母の物語に溶け入つて荒唐無稽な稗史小説の世界に屢々自分も生きているような錯覺を感じた。馬琴に限らず、江戸時代の廃類期に生れた読物や草双紙、戯曲の類は文学に与えられている本来の批判性が全く抑圧され、思想的に窒息状態に陥つてゐる時期のものだけに單純な主題を動かしてゆく筋の経緯——つまり趣向が複雑になり、怪異やエロチックな要素がアブノーマルに發展して、官能を刺激する傾向が強くなつてゐる。その世界では、道義と悖德、美と醜が極端に誇張され、特殊な様式化によつて表現されている。忠義とか孝行とか貞操とかの美德を離れることなく肉体に宿してゐる勇しい男や女があらゆる詭詐と迫害と凌辱に耐えて精神の光を増してゆく話や、美貌の悪人が思い切つて非情に惨忍な悪事を犯す有様や、ともあれ南北や默阿弥の歌舞伎、馬琴や種彦の読本草雙紙の世界では、人間は千変万化する虚構の縦糸横糸となつて金銀五彩のけばけばしい織物をくりひろげるが、そこには土の匂いや芽の勢い、太陽の溢れる自然は片はしも見られず、すべてが人工的な照明に彩られた——言わば劇場的な世界なのであった。

たねの話上手につられて、滋子は時に前髪立ちの美少年になつて敵と奮戦したり、時にみやびやかな娘になつて盜賊に掠奪されたり、演劇的な感興に昂奮して華麗な色彩と光線の間生きることを覚えた。

その中でも、滋子を異様に眩惑したのは美女の虐待される所謂責め場や殺しの場面であつた。たねはそういうアブノ-

マルな趣味を持っていなかったが、彼女が若いころ自然に触れた倒錯芸術の刺激はそれを大して不健康なものと感じていなかった。例えば男女の性交などについて持つような羞恥感や悖徳感でそれらの場面を幼い孫娘に隠そうとはしなかったのである。

浦里や中将姫の雪責めだの切られお富の鬨り殺し、皿屋敷のお菊の折檻場などの話を滋子はいく度もきいた。それらの虐待される女主人公は必ず美しい若い女でなければならず、彼女達の白い軟い手や胸に荒々しい縄目が食い込んだり、箆木や弓の折れに打ちたたかれる度に髪が乱れ身体がちぎれるほど身悶えして悲鳴を上げる、その無慙さがすべて異常な美しさに感じられなければならなかった。

たねの話の中で、どれよりも滋子をゆり動かしたのは黙阿弥の紅皿欠皿の責め場だった。「落窪物語」に似た継娘苛めの話で、自分の留守に恋人と愛しあったことを知って継母が欠皿を責め苛む嗜虐性の濃厚な場面がある。書卸しは三代目田之助、この欠皿の責め場で、馬つなぎにつるし上げられている時ある日縄が切れて舞台に落ち、それが田之助の手足を断った脱疽の原因になったという。たねは若いころその書卸しの舞台を見ていた。そうして余程その刺激の強い場面が記憶に薄れず刻まれていたと見えて、度々その場面の話をした。

「継母がね、針をこんなに束にしたので欠皿の身体を刺すんだよ。さぞ痛いだろう」

たねはまるで今その針が自分の膀につき刺さるように顔を

しかめて話した。もしそんな話が滋子の内部にそれこそ異様な針になって注射されていると知ったら、たねは決して安々とそれを話しはしなかったろう。滋子は後になって、自分の心身に異常な嗜慾をめざました祖母自身はこれらの廃顔芸術の毒を身に受けなかった健康な女だったと苦笑するのである。祖母は性慾に恬淡であったので恐らく嗜虐性の官能についても無智であつたのであろうが、彼女の呼吸した青春の雰囲気は孫娘の中に美しい昔のような毒を見事に移し植えたのである。人間の生活の中の欠くことの出来ない要素が全部といていいほど無自覚の中にうけ継がれ生い育ってゆくのは一体何に誰れに抗議すればよいのだろうか。

幼い滋子はそういう祖母の物語の世界から実際にはそうさなく鬼ごっこや鞠つきの世界へ帰って来ることが出来た。子供らしい遊技やいたずらもたしかに面白いには違いなかったけれども、そういう子供らしい無邪気な世界の他に人間の智能が人世から虚構した第二の世界の魅力は早くも幼い滋子に一種の毒を放射しはじめていた。滋子の興味は現実の生活よりもその第二の世界の人工的な光線から与えられるものに動かされ易くなっていた。勿論幼時の祖母の物語の世界が滋子に与えたものはアブノーマルな官能ばかりではなかった。同じ物語の世界の中のストイックな道德性、節操とか名譽とかを物質より遙かに高く置く武士の意気地風な倫理の形而上性も、彫刻的な美しさで滋子の中に滲み透った。この倫理性と嗜虐的な性の倒錯は一見同じ人間の中に住みきれそうもなく

て、実はちゃんと見えない場所で秘かな手を結び合える素質のものだった。何故といえはこの二つの観念は、春の土が小さい芽を自ら芽ぶかせるような自然と生物との握手から生れたのではなくて、二つとも自然と背を向けたところで人間が勝手に創り出した倫理であり嗜好であったのだから……武士道的倫理観も嗜虐性の文学も根元に於いては自然な生命を閉め出した冷たい孤独な心の美化なのである。

滋子が六つになった年、藤木の家は麴町から大久保の抜弁天の近くに移った。藤木の念願であった小さい舞台のあるスタジオが広い庭の空地に建てられた。そのスタジオの敷地があることのために、藤木は家族をこの家へ移らせたのである。

藤木の盟主になっている「近代座」という劇団のメンバーが始終家に入りして芝居の稽古や研究会にそのスタジオを使った。

祖母は余りスタジオへは来なかったが、滋子は女中に連れられてよくその小さい劇場の客になった。出しものは主に西洋の近代劇であったが折々はシエクスピヤやヘッセルなども試演した。人形でよりほかに見たことのない亜麻色や金髪の巻毛の髻を冠った人達が早口に話したり歩きまわったりする様子は同じ芝居といっても祖母に連れられて行く歌舞伎の舞台とはまるで様子が違っていて面白くもあり多少気味悪くもあった。しかし元来劇場的な育ち方をしている滋子は小さい

癖にイブセンやストリンドベルヒの科白ばかりで押し通す長い幕をみていても、一向飽きずに凝々と舞台を見ているので、「流石に先生のお嬢さんですね」

と藤木がからかわれることがあった。

ある日滋子は女中に腰をおさえられて椅子の上に立ち、舞台の方をみながらむずかっていた。芝居があるというので見に来たのに舞台はがらん洞でいくら待っても誰も出て来ないのである。

「つまらないわ、まだお芝居はじまらないの」

「もう少しするとはじまりますって……お嬢さま、それとも外へ出て弁天さまへ行つて来ましょうか」

「いや……弁天さま、いや……お芝居がいいの」

「ですから……もう少し待つとはじまりますって」

「いや……いやん」

滋子は何となくじれて来て肩を振った。スタジオの中のうす暗さが急に怖くそれかといって外へ出る気もしない撞着した気持ちがかんぐらかつて滋子は泣きかかっていた。

突然滋子は口に何かおし込まれた。びっくりして抑えられたごつごつ骨ばった指の下で舌を動かすと甘ったるい粘りが口の中で溶けはじめた。おやと思った途端滋子はふわりと抱上げられていた。何だか壁土臭い匂いがする。滋子は抱いている人を見ようとしたが、粗い毛のようなものがごわごわ頬に触って見えなかった。

「いやん、いやん」